

# 原点

間野 絢子

中央二丁目

雲一つ無い空だった。昨日も、一昨日もそうであったように。

一九四五（昭二〇）年八月六日は、何の予感もなく明けた。

防空頭巾ぼうくうづまを肩から下げた私は、紅いグラジオラスを携え、強い朝陽を日傘で避けて、いそいそと船入川口町の自宅を出た。

六月に今村外治教授の面接を受け、七月辞令が出て広島文理科大学（文理大）、地学科、副手として採用された。狭い広島のは、歩くに大した距離ではない。本川、元安川と渡って千田町の大学に着く。

戦局が不利になるにつれて、一般市民も戦力として動員され、学生たちはほとんど授業が出来なくなっていた。広島市立第一高等女学校の同学年の友たちは、軍需工場へ動員された。虚弱者五〇名が残留クラスとなり、私もその中に居た。ただで勉強させるのは無駄だと、日赤病院から医師を招き、看護婦養成クラスとされたが、それも勿体ないと、一学年下の生徒たちの学校工場（被服廠ひやくしやう下請工場）に編入された。白い鉢巻きをきりりとしたお河童頭は、髪の毛、耳たぶの下で切り揃えよと決め

られた。

陸軍軍服のボタン付けと穴かがり。下級生が縫いあげた南方戦線へ送る野戦蚊帳かやの点検。

二人がかりで麻製の蚊帳の隅々を持ち、力を込めて振りながら調べる。どこかに縫い残しがないか。兵隊さんがマラリアを運ぶ蚊に刺されてはならぬ。乙女の至誠、天に届けと一心に振れば、舞いあがる埃ほじりと共にダニも飛ぶ。私の弱い呼吸器には、過酷なこの作業が果たして役に立ったのだろうか。蚊帳の中で、前線の兵がまどろむ夜営を、ニュース映画などで見たこともない。

三月、各動員先の工場から学友たちは学校に集い、形だけの卒業式を慌ただしくすませ、また、元の部署につく。ネクタイさえ無用の贅沢品ぜいたくひんとしてはずした、モンペ姿の友の体からは機械油の匂いがする。

私も日本の少女だ。国難にあたり学業を捨てると命じられれば、拒む事はできない。けれども作業の連続の日々は、私に全

く向かなかった。それを文理大が救ってくれたのだ。

一九四三（昭和十八）年には大学生学徒出陣が始まり、研究室に生じる穴を、私のような素人で埋めざるを得ないほど、大学は人手不足になっていた。

私は学問の匂いのする場に、席を与えられた事を心から感謝した。この気持ちを現すために、先生がいつみえても、気持ち良く机に向かって下さるようにと、朝早く出勤して隅々まで掃除し、先生の机の上には花をたやさないよう心掛けた。

今朝もまだ先生はみえていないが、掃除も済み、花も活け終わった。つい今しがた、二機のB29が飛び去った空は、しんと暗れて静かだ。私はズボンとスカートにはきかえた。スカートは淡いピンクの麻。ブラウスは白とピンクのチェック。共に手製だ。

窓辺のグラジオラスの紅い花は、朝の光をいっぱいを受けて、外のささくれた空気を忘れさせてくれる程平和だ。ひとときの幸せ。

その時、朝陽に輝いていたガラス窓の空高く、まぶしい閃光が走り、おやつと見上げた目に、見馴れたB29の銀翼が光り、と同時に物凄い炸裂音を聞き、想像を絶する爆風が私を吹き飛ばし、床に叩きつけられ、瞬時気を失っていた。

気がつくとき、あたりは真暗だ。体の上には何かが乗っているけれど、それが何であるか考えている暇はない。助けを求めよ

うもない。この部屋には私一人だけしかいないのだから。

夢中で這い出し、いろんな物につまづきながら、手探りでドアを探し、階段をつたって中庭に降り呆然とした。

昼とも、夜ともつかぬ異様な暗さの校庭にはたくさんの人が倒れ、地上にはすっかり色彩を失ってペシャンコに押しひしがれ、その下からブスブスと火の手が上がり始めていた。

「直撃弾だ！」と叫びながら、私と一緒に階段を降りた見知らぬ学生も、ただうろろとあたりを見ながら、何か言葉にならぬ声を出した。

爆弾にしてはその跡がない。一面、同じ状態の破壊。倒れている人びとも信じられないほどの数。そして、さつきまで輝いていた真夏の太陽はどこへ行ったのか。この黄昏色の地球最後の日のような……。訳がわからなくても、逃げなければ火が廻ってくる。

いつの間にか、私は何百人かわからぬ、ほとんど裸体の人びとの群れにまじって、海へ向かう道を歩いていた。

人びとの姿は男女の区別もつかぬほど傷つけられていて、なぜか、灰色の物体のようだった。両腕を前に差し伸べるように出し、その手からも、背中からも、薄い布片をたらしっているとみると、それは、その人の焼けてむけ落ちた皮膚だった。膨れあがった顔の糸のように細い目。箒のように逆立った髪。一糸もまとわぬ体は人間の姿ではなかった。

逃げて行く誰かが、その人の地面にひきずっている皮膚を踏むと、その人は倒れて動かなくなった。

気がつくとき、私の体中に尖ったガラスの破片が、鋭利な刃物となって突き刺さっていた。特に左頸部の裂傷は深く、大きく、流れる血は足まで伝っている。引き千切られて少しだけ体に残っていたブラウスで、おびただしく流れる血を押さえながら歩いたが、焼け爛れた裸の行進の人びとの姿は、惨い、本当に痛ましい有様だった。

緑と河の街、広島。緑は瞬時に奪われても、河は流れている。全身を焼いた人びとは、物凄い渴きに悶え、のたうち、水を求めて河に首を突っ込み、体ごと河に飛び込み、みるみるうちに屍の運河になった。

火は後から迫って来る。

元安川をどうやって渡ったのだろうか。小さな舟を漕ぐ人に乗せてもらったような気がする。

吉島の飛行場に着くと、だだっ広い兵舎のような床に、大勢の傷ついた人たちがころがるように臥せて、

「水を下さい。水を。」

と口々に悲しそうに、訴えていた。

軍医だろうか、私の傷の中からたくさんガラスの破片を抜き取り、洗面器に入れた赤チンを塗った。看護婦らしい人が、窓の防空用の黒い表に、赤の裏打ちをしたカーテンを引き裂い

て、体中に包帯をしてくれた。そのカーテンは、裂く時大変な埃を立てたのに、傷口に当てるガーゼすらも無かった。それでもこれが、私があの人に受ける事ができた、最初で最後の治療と言えるものだった。

出血と疲労により混濁した意識の中、夕方に辿り着いた我が家（舟入川口町）は、軒も梁も落ち、満身創痍の姿でやっと焼け残っていた。

でも私は嬉しかった。ああ家に帰れた。ここには父も、母も、姉弟もみんないる。なんとかなる。そう思った。

母の顔は、人違いかと思うほど火傷で腫れあがり、瞼も唇も腫れ、両腕にもひどい火傷をして立つ事もできず、目茶苦茶になった座敷で這うようにしていた。あの時、母は玄関の前を掃いていて、上半身が塀の陰に入らず、まともに直射日光を受けていた。爆弾の熱線はその顔を、腕を焼き、家に駆け込んだ時、崩れ落ちて来た二階の梁にはさまれ、二階ごと落ちて来た弟は無傷で、母を助け出したのだと言った。

父も、次姉も、まだ帰宅していなかった。前年の秋結婚した長姉は、近くに新居を構えていた。お腹に赤ちゃんがいたが、頭を少し切ったくらいでまず無事だった。

夕方、長姉の夫が会社（三菱造船株）から帰って来た。不思議に無傷であった。（この義兄は、翌一九四六（昭和二一）年四月、原爆症で死亡し、長姉は病み続けて一九七〇（昭和四五）

年十二月原爆症で死亡。日本最初の原爆症死後認定患者となり、マスコミにも取りあげられた。)

日が落ちて八月六日という長く重い日が暮れようとしても、父、次姉は帰ってこなかった。八月六日は、私たちから人間らしい感情も奪った。生きようとする動物的な本能だけが残っている。壊れかけた家の中は危ないので、近くの畠で野宿が始まった。

私は高熱の上に、ひどい下痢と吐気に襲われた。長姉がびくくりするほど、私の首の傷は大きな口をあけていたが、不思議にさほど痛みを感じなかった。ただ、夜露に湿った野宿は余り心地よくはなかった。

昼も、夜も、アメリカ軍の飛行機が、何機も何機も低空飛行で旋回するので、今度は機銃掃射する気かな、とも思っただけで、もうこれ以上何が起こってもかまわない。どうにでもしてくれ、動けないのだから。

極限までに追い詰められた私の目には、星だけが冷たく冴えていた。私はこのままお星様になりたいと、何故かしきりに思った。

それから二、三日して全身に火傷を負い、郊外の己斐に住む友人の家に逃れ、動けないでいる父の消息を聞き、義兄と弟が大八車に父を乗せて連れ帰った。

土橋停留所で市電を待っていた父は、ベルトのバックルの所

だけを残して、すっかり焼けただれていた。皮膚を剥ぎとられた体の脚には、ゲートルに沿って登った炎の跡。頭は戦闘帽の線をくつきり付け、溶けた耳は炭化して張り付いていた。鼻孔も、食道も焼き尽くして、「水を」と言う口元に水を運んでも、それすら飲み込む事が出来なかった。

重体の父と母とを寝かせるために、壊れた家の一部になんとか横になれる場所を義兄が作ってくれた。

衛生兵が一日に一回廻って来て、白いどろどろした液状の薬をやたらに患部に塗ったが、痛んだ体を乱暴に動かされて、かえって衰弱してしまった気がする。

もう広島空には、真昼の太陽が戻っているのに、「夜だね」。

「雨が降ってるね」と父は言うのだ。

父は痛いとも、苦しいとも言わなかった。ただ、まだ消息の知れない次姉を気遣って、「郁子はまだか、郁子はまだか」と、うつらうつらの意識の間に尋ねながら、息を引きとった。(八月十一日。享年五三歳)その時、母もほとんど意識がなく、脈も途切れがちだった。

暑い夏の日のこと、死臭はすぐになつた。死亡届を出すと町会からガソリンが配給された。私たち姉弟は、義兄や、親しい近所の方がたと、荒土に父の遺体を置き、廃屋の木を積み、ガソリンをかけて荼毘に付した。私たち家族は涙も出なかった。お骨を拾い、義兄手作りの箱に納めた。

まだ次姉の消息が知れなかった。長姉夫婦は、爆心地の屍の中に次姉がいるのではないかと、毎日彼女が挺身隊員として勤務していた中国配電のあたりを探し廻った。爆心地近い市電レールの上には、ずらりと幾体もの遺体が並べられていたそうだ。その顔を一つ一つ覗き歩いて、無駄足の疲労を浮かべて帰って来た。

広島は一面死臭の漂う街になり、性別もつかぬほど変わり果てた無残な遺体が、身元不明のまま沢山あった。止むを得ずまとめて山積みにし火葬にされた。その小山から夜には青白い燐光が、電灯もない漆黒の空に、幾条も、幾条も立ち登ったけれど、私は怖くともなんともなかった。

近所の家々でも、毎日誰かが死に、誰かが帰り、夜が明け、日が暮れる。八月十五日にガラスの破片による傷のために、顔を除く右半身を包帯でぐるぐる巻きにされた次姉が帰って来た。猛火に包まれ逃げ場がなくなり、元安川に飛び込み川岸にいた所、夕方陸軍のトラックに収容され、傷口は一応縫われてはいたが、消毒が不完全だったのか、すっかり化膿し、かえって傷を大きくしていた。

大量に発生した蠅は、化膿した患部に卵を生みつけ、私たちは皆生きながら蛆虫を湧かせていた。

母が奇跡的に危篤状態を脱した八月末、ラジオも新聞もない広島に、さまざまな報道が流言飛語を伴い、口コミで入って来

た。長崎にこれと同じような爆弾が落とされた事。そして終戦を知らされた。負けた、無条件降伏をしたというはつきりとした事実を、白々とした思いで聞いた。

人びとは、この爆弾を「ピカドン」と名付けた。もうここには草木も生えてこない。人も住めない。空をおおったキノコ雲のこと。黒い雨のこと……等々。

けれども、余りに爆心地近くにいた私は雲の形も見ず、母や姉弟たちが、あの日午後浴びたという黒い雨も知らない。ああ、あの無気味な闇は、あの雲の下にいたためだったのかと、自分に言い聞かせた。

地獄絵のあと廃墟で、残った人びとは生き続けた。闇屋ものさばり、はびこった。あらゆるものが目の前で破壊され、燃えつき、死に絶えたあとに、住む家も、食べる物も、水も、灯も、肉親さえも失った傷だらけの体に、蛆を湧かせて、呼吸し、食べ、排泄し、眠り、死んだほうが楽だったとさえ思える毎日を、残留放射能の恐ろしさも知らずに、原始人のように生きていた。九月十七日の台風に洗い流され、追われるように広島を去った日まで、良くもあの地で生きた、と今しみじみ思う。

無感動に、単純に生きたかに見えるその日々は、十六歳の私の心奥深くに、消し難い傷を刻んだ。やがてその傷は、表面、癒えたかに見えるながら、何故こんなことになったかを真剣に考える私の心の原点となった。